

しにせ 蕎麦の老舗、 増田屋直系の店

そば処 本郷増田屋

旧 中山道が本郷通りにぶつかる手前、農正門からほんの目と鼻の先のところにそば処本郷増田屋はある。増田屋といえば、全国に170店余りの暖簾分け会員を持つ蕎麦の老舗。歴史をひもとけば、その元祖は明和5年(1768)に釣瓶蕎麦を引き継いだ「増田屋次郎介」にまで遡る。

暖簾分けの始祖は明治23年(1891)に麻布区筈町(当時)、日赤病院前に開業した滋賀県人の武久留吉氏。そして暖簾分けの第一号は新潟県人の古道文次氏。明治45年(1912)に原宿店を開いた。

本郷店は文次氏の娘婿にあたる武二さんが昭和13年(1938)に本郷区森川町(現在の場所)に開業したのが始まり。武二さんは創意工夫に優れ、「冷やしたぬき」を日本で初めて客に出したことで知られる。増田屋暖簾会の会長や文京区の保健機関の仕事など、本業以外にも忙しく働いたが、2年ほど前、92年の天寿を全うした。

2代目の武夫さんが店を継いだのは昭和40年(1975)のこと。多忙な父親はそば作りを教える暇がなく、番頭さんや従業員から仕込まれたという。物心ついたころから、東京大学キャンパスを遊び場に使っていたので、農学部との思い出も深い。



「子供のころ友達と農学部の花壇でいたずらをしていたら、用務員さんに見つかってこっぴどく叱られました」と笑う。また、動物病院の医師や研究員たちのチームとお昼休みに野球の試合をよくやっていたらしい。

東大安田講堂事件の頃は、店の前の通りが報道陣、学生、警察などでごった返し、蕎麦ならぬカツ丼がよく売れたという。「勝負に勝つ、ということで、普段の10倍以上も売れました。一日中カツを揚げていましたよ。一度など、弥生門まで出前を運んでいったら、注文した機動隊がいなくなっていて弱りました」。代金はあとで払ってくれたらしい。

当時は若かったので、事件では学生たちに共感を覚えた。静かな声で武夫さんはこう話す。「本当に勝ったのは、学生の方ではないでしょうか。バリケードは破られたけれど、国民にその思いは伝わりましたからね。」



そば処 本郷増田屋
二代目店主 古道武夫さん



昭和13年、本郷店開店祝いに他の増田屋より寄贈された額